

清末期中国における日本女子教育の受容
——单士厘、嚴修、張謇の日本視察に着目して——

The Acceptance of Japanese Female Education in Late Qing China:
Focusing on Shan Shili, Yan Xiu, and Zhang Jian's Japan inspection

孫 長亮
SUN, Changliang

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第46号 2018年11月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.46 2018

清末期中国における日本女子教育の受容 —単士厘、嚴修、張謇の日本視察に着目して—

孫 長亮

はじめに

- I. 官紳の日本視察の背景
- II. 官紳の日本幼稚園・女子学校への視察
- III. 単士厘、嚴修、張謇の視察及び中国女子教育の振興
 1. 単士厘と『家政学』、『癸卯旅行記』
 2. 嚴修『壬寅東遊日記』・『甲辰東遊日記』と嚴氏女学、保母養成所、嚴氏蒙養院
 3. 張謇『癸卯東遊日記』と扶海垞家塾、通州女子師範学校

おわりに

はじめに

日清戦争における中国の敗北は、清末期の朝野に大きな衝撃をもたらした。これ以降、清政府は一連の国政改革を進め、そして、明治維新後、一躍世界の強国になった日本を参考にして「日本に倣って師となす」方向へと明確に舵を切った。それゆえ、清末期の中国において、日本教習の招聘と留学生の派遣のほか、官紳の日本視察もまたその学習の重要な一環としても続々と行われていた。

近年、清末期における官紳の日本視察に関する研究はかなり進み、多くの著書と論文が蓄積されている。熊達雲『近代中国官民の日本視察』、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』、田正平、霍益萍「遊学日本熱潮与清末教育」などは優れた成果として大いに参考にすべきである¹。これらの研究の殆どは官紳らの日本視察の概観、特に新教育行政に対する清政府の改革と実践に主眼が置かれている。しかし残念なことに、それと同時に近代中国における女子教育日本化を推進した要因の1つとしても、その分野の研究に関する追求は不十分であるように思われる。

さて、本稿では、上記の問題意識を念頭に置き、まず、官紳の日本視察の背景を明らかにし、つぎに、清末期に官紳たちの『東遊日記』²を素材として、日本幼稚園や女子学校に関する視察情報を網羅的に整理して分析する。さらに、視察者から単士厘、嚴修、張謇の具体例を取り上げ、それぞ

¹ 熊達雲『近代中国官民の日本視察』（成文堂、1998）、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（汲古書院、1998）、田正平、霍益萍「遊学日本熱潮与清末教育」（『文史』30、1988）。

² 『東遊日記』とは、清末期に日本を訪れ、日本の近代化、教育、軍事、商業などの状況を視察した清政府の官紳滞在日記であり、類似の書名ひいては同名の書が数多く存在する。本稿では通称『東遊日記』という。

れの在日活動や視察現場を再現し、その受容過程においてどのように中国の女子教育に貢献したのかを解明したい。最後にこうした作業を通して、中国女子教育の近代化過程でそれらの視察者が果たした役割について検討を加えたい。

I. 官紳の日本視察の背景

清末期の官紳が本格的に日本を鑑として視察したのは、1898年初、「学務に通暁した第一人者」³と称えられる張之洞が、「札委姚錫光等前往日本遊歴詳考各種学校章程」という公文書を出し、姚に全権を委任して日本の教育を視察させた⁴、ということをもって嚆矢とする⁵。庚子事変以降、改革の必要を認識した西太后は変法の詔書を發布し、これによって光緒新政が発足した。新政の実施に伴い、山東巡撫の袁世凱はいち早く「遵旨敬抒管見備甄摺摺」を奏上し、続いて、張百熙は「敬陳大計疏」、王之春は「復議新政疏」を上奏し、いずれも遊歴考察の必要性と切迫性を力説したのである⁶。同年7月、两江総督の劉坤一及び湖広総督の張之洞は「変通政治人才為先遵旨籌議摺」を具申し、明治維新後の日本について詳細に述べ、そのうえで日本を鑑とすべきだとはっきり打ち出した⁷。「繆藝風先生行状」によれば、「朝廷では鋭意変法を行い、(日本視察に関する) 討論の助けになるよう張文襄(張之洞)が各地の名士を武昌の官衙に会合させた」という⁸。

一方、アジア情勢が緊張する中、当時東亞同文会の会長に任じられた近衛篤磨は、「清国保全」論を積極的に鼓吹し、清政府に日本視察の利点を建言した。例えば、1899年において既に近衛は、武備学堂への参観という機会に乗じて張之洞に謁見し、当時中国の教育改革に対して「清国より学生を日本に派遣するもよし、日本より教師を聘するもよし、然れ共清国の教育に従事する人々にして、自から教育視察として日本に赴くの効多きには若かざるなり」と献言したことがある。その結果、張は「以下案を拍て喜び、これかならず然らん」と答えた。翌年、近衛は、「張の昨今の動作は一々我参謀本部の方針に遵ふもの、如し」という状況をその日記に書きつけた⁹。

³ 朱壽朋編『光緒朝東華録』(中華書局、1984) 5、5036頁。

⁴ 趙德馨主編『張之洞全集』(武漢出版社、2008) 6、108頁。

⁵ 呂順長『清末中日教育文化交流の研究』(商務印書館、2012)、23頁。

⁶ 「遵旨敬抒管見備甄摺摺」(天津図書館、天津社会科学院歴史研究所編『袁世凱奏議』上、天津古籍出版社、1987)、272-273頁。「敬陳大計疏」(『皇朝道咸同光奏議』6卷下、上海久敬齋石印本、1901)。また「復議新政疏」(璩鑫圭、唐良炎主編『中国近代教育史資料匯編・学制演變』(上海教育出版社、1991)、28頁。

⁷ 「変通政治人才為先遵旨籌議摺」(前掲『張之洞全集』4)、7-14頁。

⁸ 夏孫桐「繆藝風先生行状」(閔尔昌撰録『碑伝集補』1、明文書局印行、1963)、592頁。原文は以下の通り。なお、適宜句点を施した。

朝廷鋭意変法。張文襄集東南名流会于武昌節署。以資討論。

⁹ 近衛篤磨著、近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』(鹿島研究所出版会、1968) 2、455頁。同書3、201頁。『宗方小太郎日記：未刊稿』(上海人民出版社、2016) 中巻、464-465頁。また、当時湖北東亞同文会の宗方小太郎は、武昌で日本から帰ってきた視察者が「大に日本に心酔せし者の如く、人に接する談毎に日本に及ばざるなく、気炎万丈、殆ど文武官にして未だ日本に遊ばざる者は共に伍する能はざるの勢もあり」と回想したことがある。「大演習陪観員の帰武」(神谷正男編『宗方小太郎文書：近代中国秘録』原書房、1975)、54頁。

上述した背景の下、官紳の日本視察ブームの幕が本格的に開いた。その時流に乗って、伝統的に家庭の枠内に束縛されてきた中国女子教育は、初歩的な発展を遂げたと同時に、一步一步と近代中国の教育システムという正規の軌道にのせられたが、知らず知らずのうちに日本女子教育の強い影響を受けていた。

II. 官紳の日本幼稚園・女子学校への視察

官紳の日本幼稚園・女子学校への視察について、本稿では、主に19世紀末葉から20世紀初頭にかけての『東遊日記』シリーズ、すなわち歴史学者の鐘叔河により主編された走向世界叢書の初編(2008)と続編(2016)を取り扱い、そのなかで、関連の情報を抽出して以下の表1に纏めた¹⁰。

表1 清末期における官紳の日本幼稚園・女子学校(男女共学学校も含む)への視察一覧

名前	職位	視察/遊歴 期間(西暦)	官/私 費	派遣部門及 び派遣者	視察 目的	論著及び出版時期	視察した幼稚園と女子学校
丁鴻臣	四川 提督	1899.10.1~ 1899.12.13	官費	四川総督 奎俊	日本 軍事 演習 參觀	『東瀛閑操日記』 (1900)	東京女子師範学校及びその付属幼稚園
							東京女子尋常小学校
							東京高等女子小学校
							東京華族学習院
沈翊清	福建船政 学堂提調	1899.10.7~ 1899.12.13	官費	四川総督 奎俊	日本 軍事 演習 參觀	『東遊日記』 (1900)	東京某幼稚園
							東京高等女学校
							東京女子高等師範学校
							東京某単級小学校
単士厘	なし	1899~	私費	家族随員	遊歴	『癸卯旅行記』 (1904)	日本遊歴、幼稚園と女子学校への視察なし
李溶之	山西奏巡 遊歴官等	1901.11~ 1902.4	官費	两江総督 張之洞	実業	『東隅瑣記』 (清末刊)	大阪愛珠幼稚園
羅振玉	光祿寺 署正	1901.12.14~ 1902.2.19	官費	湖広総督 張之洞 两江総督 劉坤一	教育	『扶桑二月記』 (1902)	東京高等師範学校附属小学校
							東京女子高等師範学校及びその附属幼稚園
							東京師範学校附属単級小学校
							東京私立女子職業学校
							奈良高等女学校

¹⁰ 具体的な参考文献は次の通りである。単士厘『癸卯旅行記・帰潜記』(岳麓書社、2008)、張睿・凌文淵『癸卯東遊日記・籀齋東遊日記』(岳麓書社、2016、以下同様)、丁鴻臣『東瀛閑操日記』、韓国鈞『実業界之九十日』、劉学詢・黄璟・羅振玉『考察商務日記・考察農務日記・扶桑兩月記・扶桑再遊記』、吳汝綸『東遊叢録』、陳翊清・周学熙『陳翊清東遊日記・周学熙東遊日記』、李溶之・盛宣懷『東隅日記・愚齋東遊日記』、嚴修『東遊日記』、楊泰階・文愷・左湘鐘『東遊日記三種』、呂珮芬『東瀛參觀学校記』、繆荃孫・王景禧・双寿『日遊匯編・日遊筆記・東瀛小識』、程清『丙午日本遊記』。また前掲『近代中国官民の日本視察』。ここで強調したいのは、官紳らの視察した学校の一部は男女共学学校だという可能性が高いが、それぞれの日記において言及していないため、ここで表1に入れていないという点である。例えば、羅振玉の視察した東京染織学校、繆荃孫の東京美術学校、東京美術工芸学校、嚴修の本田小学校などが挙げられる。

嚴 修	貴州学政辞任後	1902.8.10～ 1902.11.27	私費	なし	遊歴教育	『壬寅東遊日記』 (1902)	大阪愛珠幼稚園 大阪育英女学校 大阪清水谷高等女学校 東京富士見小学校及びその近くの幼稚園 東京女子高等師範学校 東京渡邊単級小学校 東京華族女学校及び幼稚園 東京音楽学校 東京常盤小学校及び附属幼稚園 東京西天満小学校及び幼稚園
	直隸省学校司督辦	1904.4.8～ 1904.7.24	官費	直隸総督袁世凱	教育	『甲辰東遊日記』	東京小石川幼稚園 東京富士見小学校及び近くの幼稚園 東京女子職業学校 東京女子大学 東京華族女学校
呉汝綸	京師大学堂総教習	1902.6.8～ 1902.10.21	官費	管学大臣張百熙	教育	『東遊叢録』 (1909、また1902、日本三省堂刊行も)	東京某女学校 東京某幼稚園 東京御影学校附属女学校 大阪集英尋常小学校 大阪某幼稚園 大阪清水谷高等女学校 京都高等女学校 東京高等女子師範学校 東京華族女学校 東京常盤小学校 東京富士見小学校 東京女子師範学校 東京女子職業学校
黄 璟	農務局会辦道員	1902.7.27～ 1902.10.7	官費	直隸総督袁世凱	農務	『考察農務日記』 (1902)	岡山市某高等小学校 岡山市某中学校 東京華族女学校
繆荃孫	江南高等学堂総教習、編修	1903.2.14～ 1903.4.8	官費	两江総督張之洞	教育政治	『日遊匯編』 (1903)	東京女子師範学校 東京第二高等女学校付属小学校 東京音楽学校 東京女子高等師範学校及び付属小学、幼稚園
王景禧	直隸普通教育処総辦兼編訳局総辦など	1903.9.21～ 1903.11.10	官費	直隸総督袁世凱	学制	『日遊筆記』 (1903)	大阪愛珠幼稚園 東京常盤小学校 東京第一高等女学校 東京万年小学校 東京女子師範学校付属高等女学校 東京師範学校 東京女子師範学校 東京高等女学校 東京女子高等師範学校 東京音楽学校 東京高等師範学校附属小学校 東京華族女学校
双松如(双寿)	在日留学生監督	1903.6.20～ 1903.9.23	官費	湖広総督張之洞	教育	『東瀛小識』	大阪愛日小学校 東京富士見小学校及び付属幼稚園 東京私立女子職業学校 東京女子高等師範学校 東京華族女学校
周学熙	銀元局総辦道員	1903.4.5～ 1903.6.4	官費	直隸総督袁世凱	貨幣制度	『東遊日記』 (1903)	東京女子高等師範学校
張 春	通州師範学校総理など	1903.5.23～ 1903.6.30	私費	日本駐寧領事に招かれる	日本第五回国勸業博覧会	『癸卯東遊日記』 (1903)	長崎私立鶴鳴女子学校 大阪愛日小学校 大阪愛珠幼稚園 大阪東区第一高等小学校 大阪桃山女子師範学校 札幌公立単級小学校 大阪府師範学校附属小学校
凌文淵	不詳	1903.4.18～ 1903.7末	官費	三江師範学堂総辦劉世珩		『籀龔東遊日記』 (1904)	東京府師範学校 東京女子高等師範学校 東京女子職業学校

韓国鈞	河北鈺務局総辦兼交渉局会辦	1905.9.16～1906.1.24	官費	河南巡撫陳夔龍	実業	『実業界之九十日』	東京常盤小学校 東京潮海小学校 東京富士見小学校 東京高等女子師範学校及び付属小学校、幼稚園 東京浅草第一高等女学校
楊泰階	另補知県	1907.2.6～1907.5中旬	官費	浙江提学使支恒榮	教育	『東遊日記』(1907)	東京尋常師範学校附属小学校 東京高等女子師範学校及び附属小学校 東京高等師範学校附属小学校 東京常盤高等尋常小学校附属幼稚園 東京女子師範学校附属小学校 東京一橋女子職業学校 東京高等女子学校付設技芸女学校 東京有馬尋常小学校 東京富士見小学校
文 愷	甘肅慶陽府知府	1907.2.9～1907.5.8	官費	学 部	教育政治	『東遊日記』	東京東華尋常高等小学校 東京女子高等師範学校及びその付属高等女学校、尋常・高等両小学校、幼稚園 東京高等師範学校附属小学校 東京女子師範学校
呂珮芬	翰 林	1907.9.23～1907.12.12	官費	学 部	教育	『東瀛參觀学校記』(1908)	東京上六小学校 東京富士見小学校 東京音楽学校 東京蠶業講習所 東京鮫校特殊小学校 東京松川小学校 東京府立女子師範学校 東京実践女学校 東京女子高等師範学校
左湘鐘	柏馨県知県	1908.5.28～1908.8末	官費	直隸督撫	教育政治司法	『東遊日記』	東京女子高等師範学校及びその付属高等女学校、小学校、幼稚園 東京私立女子美術学校
程 清	山西『晋報』主筆	1908.9.12～1908.11.13	官費	山西巡撫恩 寿	工芸医学	『丙午日本遊記』(清末刊)	東京女子高等師範学校 東京女子職業学校 東京東洋女芸学校 東京産婆学校 東京女子美術学校 東京万年尋常小学校 東京家庭学校 東京華族学習院

上表に示したように、まず、日本幼稚園・各類型の女子学校への視察の主流となったのは清政府に派遣された皇族・貴族というよりも、官費で各省の総督や巡撫に派遣された官僚たちであった。そして、派遣された多くの人員は各地方の行政や教育などを司るリーダー層が中心であり、私的な関係を通じて日本視察を行った開明的な郷紳でもあった。

つぎに、視察の時間帯について、官紳の多くは1907年3月に学部が「奏定女子小学堂章程」、「奏定女子師範学堂章程」を公布する前に日本へ赴き、すなわち清政府がまだ中国女子教育を本格的に承認する前である。換言すれば、それらの官紳は殆ど例外なしに、日本へ赴く前に清政府や地方の総督や巡撫からの女子教育視察に関するいかなる指図も受けず、私的な行為で比較的長い時間をかけて日本の幼稚園と女子学校を視察・調査した。そして、帰国して間もなく、彼らは、それぞれの見聞録を『東遊日記』に整理して刊行させた。これは日本女子教育を紹介すると同時に、中国女子教育を振興する重要なルートの1つにもなった。

さらに、その時間帯における彼らの視察目的は多種多様だといえるべきである。例えば、楊泰階、

双松如、呉汝綸、羅振玉が教育、李濬之、韓国鈞が実業、周学熙が貨幣制度への視察を中心に渡日し、沈翊清、丁鴻臣らが軍事演習への参観、黄璟が農業に重点を置いて視察し、張謇、凌文淵が日本第五回内国勸業博覧会への参観を目的とした。したがって、女子教育に対する視察は、それらの官紳の本来の渡日目的ではなかったと言える。一方、ここで注意すべき点は、丁鴻臣、沈翊清、羅振玉、呉汝綸、繆荃孫、黄璟、周学熙、韓国鈞などの官紳は、渡日後、日本明治政府の外務省、文部省などの機関と関係があったということである。それらの機関が、人を派遣して埠頭で官紳を迎えたか、積極的に電話で連絡したか、いずれにしる、官紳と視察先の間で橋渡しの役割を担った。また、双松如のように自ら積極的に文部省を頼ったこと、或いは王景禧のように清国駐日公使館を介して日本の外務省、文部省などと連絡を取ったこともあった。つまり、日本女子教育への視察について、それらの渡日官紳の多くは、まず日本側の女子教育を含むそれぞれの視察案内の通りに日本人の案内者とともに視察し、中国女子教育の立ち後れという現状を十分に知っている視察中の彼らが、日本女子教育の現場を見て強い刺激を受けた。その結果、積極的に日本の幼稚園や各類型の女子学校を視察して詳しく記録したということであろう。もちろん、張謇のように、渡日する前にすでに女子教育振興への関心を寄せた官紳がまだあると思われる。その点に関する検討は、今後の課題としたい。

Ⅲ. 単士厘、嚴修、張謇の視察及び中国女子教育の振興

前章では、官紳の日本視察の背景と日本幼稚園・女子学校への視察概観について述べた。それでは、それらの官紳は在日活動の見聞や、幼稚園・女子学校への視察現場についてどのように描いたのか、また、その受容過程においてどのように中国の女子教育に貢献したのか。以下、先行研究を踏まえつつ、新史料の発掘過程において、比較的まとまった早期に渡日した女性先行者の単士厘及び、教育界で「北嚴南張」と謳われている嚴修、張謇という3人の具体例を取り上げたい。

1. 単士厘と『家政学』、『癸卯旅行記』

単士厘（1856～1943）は、また錢単士厘ともいう。字は蕊珠、号は受茲。浙江省の蕭山出身。代々読書人の家柄の生まれである。彼女は名実ともに大家の令嬢で、読書に優れた博識であるのみならず、文章にも長けている。その著作としては、『癸卯旅行記』、『婦潜記』、『受茲室詩稿』、『正始再続集』などがある¹¹。1899年、単は、息子2人を連れて日本に駐在して湖北留日学生監督に任じられる夫の錢恂（1853～1927、字は念劬、浙江省の呉興出身。戊戌の翰林、留日学生派遣の最初の提議者¹²）のところに赴いた。日中両国の間をよく往復していた単は、日本語を積極的に勉強し、会

¹¹ 陳玉堂編『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』（浙江古籍出版社、2005）、845頁。

¹² 同上、1009-1010頁。また国家清史編纂委員会編『近世人物志』（北京図書館出版社、2007）、251頁。

話力も翻訳力にも優れ、日本の女性知識人の友人を多くつくった¹³。特に著名な日本女性教育者の下田歌子と親交があり、次のような詩句で下田を評価した¹⁴。

六載交情幾溯洄	六年の交情を 幾度も溯洄し
一家幸福荷栽培	一家の幸福は 栽培を担って頂いたことである
扶持世教垂名作	その世の教育を扶け 名作を残し
伝播德音愧訳才	優れた教えを伝えたことは 翻訳の人才に留まるものではない
全国精神基女学	全国の精神は 女学に基づき
隣邦風気頼君開	日本の気風は 君に頼って開かれた

ここでの「栽培」とは、歌子が単の息子（錢稻孫）の妻、錢豊保を教育したことを指す。錢豊保は、1900年、単に随行して日本に赴き、翌年秋、下田歌子の実践女学校に入学した。1904年7月、錢は同校の普通科を卒業し、実践女学校で初めて卒業した中国人女子留学生の1人でもあった¹⁵。単は、「女学生については、我が家が第一人者であること、言うまでもない」と言ったこともある¹⁶。

一方では、歌子との交情を大切にし、息子の妻に対する「栽培」という感激の意を込め、他方では、日本女子教育に心を尽くす歌子の精神に深く感服した。したがって、単は歌子を手本にしてその『家政学』を翻訳し、中国女子教育の普及のために力を尽くそうとした。単の翻訳版は、適切で易しい家事科を中心に、上巻六章（総論、家内衛生、家事経済、飲食、衣服、住居）と下巻七章（少児教育、家庭教育、養老、看病、交際、避難、婢僕使役）からなり、1902年9月上海広智書局により発行された。夫の錢恂はその翻訳書のために次のような序を書いた¹⁷。

我が妻単士厘は日本語を学んでからほどなく、日本女学者の下田歌子著『家政学』を読み、易しく日用に近い内容を取って中国語に翻訳した。これをもって我が民衆を誘導・啓発し、外人が教育を重んじていることを知らせようとした。家政ですらもそのようであるから、ましてそれ以上の事においてはなおさらである。

1902年8月6日の『中外日報』は、「新訳日本女学士著家政学」という題で、「女子が本を翻訳す

¹³ 蕭虹編『中国婦女伝記辞典：清代卷（1644-1911）』（悉尼大学出版社、2010）、138頁。日本の女性知識人の友人に関する考察について、例えば、愛住女学校校長の小具貞子、東京校中女幹事の時任竹子、上海務本女学堂教師の河原操子、熊本県の柳原氏などが挙げられる。また、その『癸卯旅行記』（1903年4月7日）には、「訪東国女友数人（日本の女性友人数人を訪ねた）」という記載もある。前掲『癸卯旅行記・帰潜記』、701頁。

¹⁴ 「丙午秋留別下田歌子」（単士厘著、陳鴻祥点校『受茲室詩稿』湖南人民出版社、1986）、45頁。また下田歌子著、単士厘訳『家政学』（広智書局、1902）、序言部分。

¹⁵ 周一川『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会、2000）、59頁。

¹⁶ 前掲『癸卯旅行記・帰潜記』、701頁。原文は「女学生之以吾家為第一人、固無論矣」である。

¹⁷ 前掲『家政学』、序言部分。原文「予妻単士厘初通日本文、読彼邦女学者下田歌子所著《家政学》、取其浅近而切于日用、遂訳為漢文。欲以誘啓華民、俾知外人重教育、即家政一端已如此、況其進焉者乎」である。

るのは、これまでの中国でなかったことだ」と称賛した¹⁸。このように、単は歌子の『家政学』を中国に導入して宣伝した初めてのものであるだけでなく、清末期における極めて少ない女性翻訳者の1人でもあり、さらに女学を唱えて女子の国民意識を高めようとした先駆けであった。

一方、1904年、張百熙、榮慶、張之洞などが上奏し、新教育システムである「癸卯学制」を起草した。そのなかの「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」は、近代における初めての学齢前の幼児教育に関する法規として、女学を創設する「流弊は甚だしく多い」ということを口実にして、女学はただ家庭教育に属すると定めた。しかし結局のところ、それは中国歴史上で初めて女子教育を本格的に日程にのぼらせ、そのあとの発展の基礎を打ち固めることとなった。ここで強調したいのは、その章程で第一章第九節の女子用教科書に関して、『女誡』、『女訓』、『教女遺規』といった伝統的な女子訓戒書籍のほか、中国の婦道や婦女の職にふさわしい歌子の『家政学』が、女子教育用の専門書籍として、中国家庭の使用対象に並べ入れられたことである¹⁹。残念なことに、歌子の『家政学』が如何にして章程に列されたのかに関する史料の検討はまだ不十分であるが、単の夫錢恂が張之洞の幕僚として、その裏で糸を引いた可能性があると考えられる。

1903年、単は夫に同行して駐在先の日本から出発し、日本（大阪・京都・神戸・長崎）→中国→朝鮮→ロシアを2ヵ月半あまりの間に自らの足で回りながら各地での見聞を記録した。翌年に刊行された『癸卯旅行記』は中国で初めて女性によって書かれた海外旅行記である²⁰。その巻首には、次のように書かれている²¹。

今や女学が次第に萌芽し、女子の知識も次第に開かれており、必ずやこれを喜んで読む者がいるはずである。それゆえ少し句読を増減して広く世に知らせる。

続いてその自序において、次のように述べている²²。

私は毎日書き留めることがあり、それは途切れたことはないが、日常の煩瑣で些細な事を振り返るのみで、保存するほどのものではない。ただこの旅行日記は……木版刻印されて本となり、名づけて『癸卯旅行記』という。我が同胞女性が、或いはまたこれを見て遠征を羨むことがあるだろうか。私は切にそれを待ち望んでいる。

このように、本書の執筆目的は、自らの遊歴体験を通じて国内の中国人女性に広く海外の見聞を知らせ、女学振興に関する期待を表すものであった。単は、日本での見聞をそのまま紹介するだけ

¹⁸ 劉志琴編『近代中国社会文化変遷録』（浙江人民出版社、1998）2、361頁。原文は「女子訳書、為中国向來所未有」である。

¹⁹ 「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」（朱有瓚『中国近代学制史料』2輯下冊、華東師範大学出版社、1987）、748頁。

²⁰ 前掲『癸卯旅行記・帰潜記』、657-659頁から抜粋。また前掲『近代中国官民の日本視察』、付録一、19頁。

²¹ 同上、683頁。原文は「方今女学漸萌、女智漸開、必有樂于読此者。故稍為損益句読、以公于世」である。

²² 同上、684頁。原文は「予日有所記、未嘗間斷、顧瑣細無足存者。惟此一段旅行日記……録付並木、名曰《癸卯旅行記》。我同胞婦女、或亦覽此而起遠征之羨乎？跂予望之」である。

でなく、しばしば中国女子の現状と結びつけて自分の見方を伝えた。例えば、3月16日に大阪博覧会の教育館を参観した時、次のように述べている²³。

日本が今日世界に立ち、滅亡を免れ強國に申し上がった所以は、ただ教育によるものである。……教育の意図は、すなわち本国が国民を養成することであり、……それゆえ男・女ともに重要であり、そして母教から始まらない子どもはない。従って教育の根本を論じれば、女子が男子より何倍も重要である。中国でも、最近また教育を論じているが、……国民を重視してはならず、それゆえ女子教育を談論する者は極めて少ない。……国民がなければ、一つの社会は成り立たない。中国の前途は一番鶏がまだ夜明けを告げておらず、日本の教育館を参観すると、感慨に堪えない。

単は、中国の女子教育と国民意識の覚醒、国民の養成、社会の形成との緊密性を痛感しており、そして女子の新しい社会的地位、獲得すべき教育権利をも積極的に鼓吹した。また、古来の女徳の影響を大きく受けた単が、中国の伝統的な婦徳を固く守るべきだと強調したのはもとより、それと同時に中国の女子が終日一室に閉じ込められるべきではなく、学ぶために積極的に外に出て歩くことを勧め、特に日本女学のなかには中国女徳の影響も強く見られるため、日本を手本にすべきだと提言した。この点については、以下、単が大雨のなかで錢豊保を連れて大阪の博覧会を参観したこと、および一時帰省の単がその弟である単伯寛の友人と一緒に日本女学を議論したことからよく窺える²⁴。

中国の婦女はもともと外出することが少なく、まして大雨を冒して人の多い公の場を歩くなどはなおさらである。私は息子の妻に「今日行くのは専ら知識を広げるため、雨の中に身を擲っても礼儀に背くものではなく、況して夫の両親のお供をして行くのだから。しかし東京に帰ってからは、校則を守って軽々しく外出すべきではない。私は婦徳を論じれば、中国の方が勝っていると思うが、学ぶことがないのを恨むだけだ。日本人は婦徳を守り、またさらに学んでもいるのは、尊ぶべきことだ」と告げた。

伯寛の友、顧と金の二氏が私に会って日本の女学のことを話したいと言ってきた。……女学の

²³ 同上、686-687頁。原文は以下の通り。

日本之所以立于今日世界、由免亡而躋于列強者、惟有教育故。……教育之意、乃是為本国培育国民、……故男女並重、且孩童無不先本母教。故論教育根本、女尤倍重于男。中国近今亦論教育矣、……而尚未注重国民、故談女子教育者尤少；……無国民、且不成一社会！中国前途、晨鶏未唱、觀彼教育館、不勝感慨。

²⁴ 同上、692、697-698頁。原文は以下の通り。

中国婦女本罕出門、更無論冒大雨步行于稠人広众之場。予因告子婦曰：“今日之行專為拓開知識起見。雖躑躅雨中、不為越礼、況尔侍舅姑而行乎？但歸東京後、当恪守校規、無輕出。予謂論婦徳究以中国為勝、所恨無学耳。東国人能守婦徳、又益以学、是以可貴。

伯寛之友顧、金二君、欲見予談日本女学事。……為談女学之宜从女徳始、而女徳云者、初非一物不見、一事不知之謂、略举日本女学校教法告之。中国女学雖已滅絶、而女徳尚流伝于人人性質中、苟善于教育、開誘其智、以完全其徳、当為地球無二之女教国、由女教以衍及子孫、即為地球無二之強国可也。

宜を話すために女徳から始めた。女徳というものは、そもそも何物も見えず、何事も知らないというものではない。いささか日本の女学校の教え方を例に挙げて話した。中国の女学はすでになくなってしまったとは言え、女徳はまだ人々の性質の中に伝わっており、もしも教育に優れ、その智を導くことによってその徳を完全なものできれば、地球上で無二の女性教育国となるだろう。女性教育からさらに子孫に及ぼせば、すなわち地球上で無二の強国となるであろう。

以上から分かるように、単は、日本での見聞を通じて、精神的な呼びかけ方を採用して中国の女子を呼び覚まそうと図り、具体的には、日本女子教育を手本にしてその熱心に学問に励む精神を推奨しただけでなく、「大門不出、二門不邁（大門も出ず、二門も邁まず）」などの伝統的な礼法を蔑視して近代的な教育文明を唱道した。彼女が国民教育を目指しており、国民を重視するならば女子教育を振興すべきだという見解を有したのは、外交官の妻として、また外に打って出て進歩的な女性観を持った知識人女性としての先覚であろう。

2. 嚴修『壬寅東遊日記』・『甲辰東遊日記』と嚴氏女学、保母養成所、嚴氏蒙養院

嚴修（1860～1929）は、字は範孫、別号は静遠。直隸省の天津出身。1883年第二甲第11位で進士に合格し、初めに翰林院庶吉士に選ばれ、次いで翰林院編修、貴州学政に任ぜられた²⁵。任官中の嚴は、光緒帝に上書して科挙と異なる官吏登用法である「経済特科」の開設を奏請したゆえ、その師である翰林院掌院学士の徐桐を含む保守派を怒らせ、止むを得ず官界から離れて天津に帰った。庚子事変後、嚴は「教育救国」の道を歩むことを決意し、中国に新式教育制度を導入するために、日本の教育発展の経験に学ばなければならないと考えた。清末期の嚴は、1902年と1904年の2度日本へ赴いたことがある。1902年は自費で渡日し、帰国後、その見聞録を『壬寅東遊日記』に整理して同年に刊行された。また1904年5月、嚴は直隸総督袁世凱の招きにこたえて再び官途に戻り、直隸省学校司督辦の任に就いて全省の教育を司った。これをきっかけにして公費で2度目の日本へ赴き、その間に『甲辰東遊日記』を書いた。

私費でも公費でも、嚴の最も重要な目的としては、正に教育制度、課程、方法に対する調査である。それと同時に、同じ時期の中国女子教育が殆どゼロに近い現状に通暁している彼は、日本の幼稚園や女子学校にも視線を向けた。紙数に制限があるため、ここでは嚴の2回の『東遊日記』から日本の幼稚園教育や女子教育に関する記録をいくつか選び、検討を加える（波線は筆者が補充した

²⁵ 前掲『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』、467頁。

内容、以下同様)²⁶。

1902年

9月2日 泛愛幼稚園と愛珠幼稚園への参観

七時半、大阪清語学校校長清水芳吉君とともに泛愛幼稚園に行き、保母の山口政子に会った。大野春子もいた。幼児が歌いながら環状に歩いていることを見た。彼らは歩調がそろっていた。……大野鈴子に会って愛珠幼稚園への参観に誘われ、山口と離れた。愛珠幼稚園は明治十三年六月一日に創設され、定員数は百八十名、建築等の費用は八万六千六百余円で、毎年の経費は三五百六十元である。学生は六つのクラスに分けられて、その授業は表にされ、唱歌、遊嬉、内遊、外遊、積み木、……説話等の科目が設置された。……授業の難易度はその年齢の長幼によって行い、クラスごとに一人が教える……

9月3日 清水谷女学校での参観と講演

²⁶ 前掲厳修『東游日記』、38-39、53-55、58、126-127、130-131頁から抜粋。具体的には以下の通り。

9月2日 参観泛愛幼稚園与愛珠幼稚園 七時半同清水君赴泛愛幼稚園、晤保母山口政子。大野春子在焉。観幼童唱歌環走、步伐齐整……遇大野鈴子、約至愛珠幼稚園一看、乃辞山口而出。愛珠幼稚園始設于明治十三年六月一日。額設百八十人、建築等費八万六千餘元、歲需經費三千五百六十元。学生分六班、其課程列于表者有唱歌、遊嬉、内遊、外遊、積木、……説話等目。……課之難易各視其年之長幼、每班一人授之……

9月3日 在清水谷女学校講演 又同往清水谷女学校、校長大村忠次郎也。……大村導観各室。有授理科者、有授英文者、有授数学者、有授図画者、有教裁縫者。看畢、至一総匯之処、众生雁行坐。大村請麻生君登台演説、又強余演説、余敷衍数語、清水君訳之。大村贈章程一本。

9月16日 山崎彦八与富士見小学校 七時後山根君來電話、約往観富士見小学校。九時往、晤其校長山崎彦八君。先延入其所居室、題曰“成績陳列室”。四壁懸冊簿、皆本校学生所交功課、或為字、或為画、或為紙粘諸花樣、挾其尤異者而存之也。裝訂整齐、注明某年生某某。……一室 一年女生 女師率諸生立而唱歌、蓋依時限、本応出外遊戯、因阻雨而變通也。一室 高等一年女生 裁縫 女師授算計尺寸而録于冊。一室 高等四年女生 □師授習字。……日本之初改良也、先立小学校、漸増女学生、次立幼稚園、次立女学校—山崎云。

9月19日 参観女子高等師範学校 午後観女子高等師範学校。……録智崇所記：女子高等師範学校生徒本科二百八十人、年齢十七以上二十二以下、四年卒業（三年半学、半年実地実験）。学生俱有寄宿舎、非日曜日不許外出。毎日五時起、洒掃盥洗、六時朝食、八時至四時半理課、五時浴、五時半夕食、夜自習、十時休息。……是日所見：英文二年生（教師曾出洋）、家政（女教師）、技芸四年生（師不在）、裁縫一年生（女師）、習字三年生（男師）、裁縫二年生（第一年制布衣、二三年制上等衣）、地理国史専修科（男師）、国語本科一年生（男師講漢文）、地理標本室、歴史標本室、物理（試空気が圧力）、化学、図画（男師）、博物館、図書室、家庭礼儀教室（附料理室）、自習室（容二百八十人、毎案俱有電灯）、体操場（擊球）、舎監室、寄宿舎（七人一室、室外俱設風琴）……医局（毎日有兩医到局）、病室（無一病者）、談話室（共七間）、食堂。

6月21日 共立女子職業学校の印象 八時同伯苓兄、智崇同往。……分甲乙兩科、職業則裁縫、編物、刺繡、造花、図画、凡五科。甲科生限二科、乙科選一科。甲乙科之外又置補習科与割烹科。以上為術科。術科之外有学科、其目五：曰修身、曰国語、曰算数、曰家事、曰理科。兼修術科、学科者為本科生、僅習術科者為選科生。……一老者導観樓之上下。刺繡、造花、図画、三科僅見一処、裁縫室則屢見。……最後入割烹室、……老人置菹于俎、教切断之法……

6月25日 参観女子大学並晤成瀬仁蔵 大隈伯所介紹也。校長成瀬仁蔵君陪話片刻、贈本校規則、本校一覽、本校学報、人各一本。庶務八木兼夫君導観各講室及寮舎。学科分預科、本科、研究科。預科分普通預科、英語預科。本科分家政部、文学部、教育部、体育部、美術部、音楽部、理科部、其各部中又分選修科目、必修科目、修業年限以三年為期。

また藤川君、清水君と一緒に清水谷女学校に行った。校長は大村忠次郎である。……大村は各部屋を案内し、理科、英文、数学、図画、裁縫を教える者がそれぞれいた。参観終了後、すべての生徒は集合所に至って整然と座った。大村は麻生君に演壇に立って演説することを頼んだ。また私にも演説をさせた。清水君に通訳してもらい、私は二言三言話した。大村君は一冊の章程を贈ってくれた。

9月16日 富士見小学校への参観

七時後、山根正次君からの電話を受け、富士見小学校への参観に誘われた。九時に出発してその校長山崎彦八に会った。まず、その居室に入ると、「成績陳列室」との題額があった。四面の壁に簿冊が掛けられており、それはすべて本校生徒の提出した宿題である。文字や絵画、或いは様々な模様のシールがある。そのなかでの優れたものが保存され、きちんと装丁されて何年生某々と注記を付けている。……

一室 一年女生徒 女教師はすべての生徒を率いて立って歌う。もともとの時限によれば、室外で遊戯をすべきだが、雨のために計画変更したのでだろう。

一室 高等一年女生徒 裁縫 女教師は寸法を測ってノートに記録することを教える。

一室 高等四年女生徒 某教師は習字を教える。

……

山崎は、日本の最初の改良は、まず、小学校を設立して次第に女生徒を増え、次に幼稚園と女学校を設立したことだと言った。

9月19日 女子高等師範学校への参観

午後、女子高等師範学校を参観する。……智崇（嚴修の息子）の記載を録する。女子高等師範学校生徒について、本科は二百八十名、年齢は十七歳以上、二十二歳以下であり、卒業年限は四年（三年半学習、半年実地演習）である。学生は全部寄宿舎があり、日曜日にしか外出を許さない。毎日五時には起床、掃除・洗面、六時は朝食、八時～十六時半は授業、十七時は入浴、十七時半は夕食、夜は自習、二十二時は就寝だと規定されている。……この日に見たのは以下の通りである。

英文二年生（教師は留学経験有）、家政（女教師）、技芸四年生（教師不在）、裁縫一年生（女教師）、習字三年生（男教師）、裁縫二年生（第一年綿服作り、二、三年上質な服作り）、地理国史専修科（男教師）、国語本科一年生（男教師が漢文を教える）、地理標本室、歴史標本室、物理（空気圧力実験）、化学、図画（男教師）、博物館、図書室、家庭礼儀教室（料理室付き）、自習室（二百八十人収容可、机ごとに電灯付き）、体操場（野球）、舎監室、寄宿舎（一室に七人、室外で全てオルガン付き）、医局（毎日二人の医者有）、病室（病者なし）、談話室（計七部屋）、食堂。

1904年

6月21日 共立女子職業学校の印象

八時、伯苓、智崇と一緒にいった。……その学校は甲、乙両科に分けられ、職業は裁縫、編物、刺繍、造花、図画、計五科である。甲科生は二科、乙科生は一科を選ぶ。甲乙科のほか、補習科と料理科も設置される。以上は術科である。術科のほか、五つの学科が設置され、すなわち修身、国語、算数、家事、理科であり、術科と学科を学習する者は本科生、ただ術科だけを学習する者は選科生である。……一人の老人が建物の上下を案内した。刺繍、造花、図画について、それぞれ一室だけ見た。裁縫室は何度も見た。……最後に料理室に入った。……一人の老人は漬物をまな板に置いて切り方を教えていた。……

6月25日 女子大学への参観と成瀬仁蔵との面会

大隈重信に紹介された。校長成瀬仁蔵がしばらく随行し、本校の規則、一覧、学報を一人一部ずつ贈ってくれた。庶務八木兼夫が各講室及び寮舎を案内した。学科は予科、本科、研究科からなっている。予科は普通予科、英語予科、本科は家政部、文学部、教育部、体育部、美術部、音楽部、理科部に分けられる。その各部のなかで選修科目と必修科目に分けられ、修業年限は三年である。

以上から分かるように、1902年の厳は視察の対象が広範であり、そして、視察先ごとに校長などの責任者の案内を頼んで、幼稚園や各女子学校の設置と運営費用から、その規模、教職員構成、生徒人数、課程設置、授業活動、授業方法などに関しても逐一記録していた。彼は、子どもや女生徒たちがどのような授業をしていたのか、授業の内容はなにか、保母や教師たちがどのように教えたのかなどに大いに興味を示してその経験を吸収した。初回と比べると、1904年の厳は、日本の学制に重点を置いて視察を行った。そのため、わざわざ文部省の講座に10回参加しただけでなく、専門的な師範付属小学校の参観学習会をも7回体験した。一部の興味深い授業に対してそのまま1回聞くだけではなくて何回も参観学習したこともある。そのなかで女生徒授業の様子を多く参観し、日本の女子教育を羨み、「吾国の女子は悲しい」と深く感嘆したこともある²⁷。また、厳は視察の過程において多くの日本友人をもつかった。例えば、何度も厳とともに視察した日本教育家の伊沢修二、日本衆議院議員の山根正次、華族女学校校長の下田歌子、清水谷女学校校長の大村忠次郎、大阪清語学校校長の清水芳吉及び友人 大野舎吉の2人の姪、大野鈴子と淇澳小学校教習大野鍮子などがいた。

帰国後、厳は、男子教育・女子教育、学齢教育・学齢前教育をともに重んじる方針を守り、男子教育を展開したと同時に、積極的に中国の女子教育事業にも身を投じた²⁸。そして2度日本への視察を通じて「明治維新後、日本が一躍世界の強国となったのは、西洋の科学と教育制度を学んだか

²⁷ 同上、137頁。

²⁸ 厳仁庚「略談先祖範孫公的教育思想和興辦新学的業績」(厳修自訂、高凌雲補、厳仁曾増編『厳修年譜』齊魯書社、1990)、511頁。

らだ。中国の教育制度を改革して『強国富民』という目的を達成するには、日本をもって師となすべきだ」とはっきり示した²⁹。中国教育者の陳宝泉は、教育界の道德家とする嚴が日本のような家庭教育を最も厳しく律したとも評価した³⁰。1902年11月27日、初回の2ヶ月を期限とする日本視察を終えた嚴は天津に帰り、自宅を実験場、家塾を過渡期として、日本女子教育を参考にして女子学堂の創立準備にとりかかった。12月17日、嚴氏女塾が創立され、当時、天津「女学振興の起点」と称された³¹。開塾初期、入塾の生徒は主として嚴の娘、姪、息子の嫁、甥の妻などといった嚴氏家族の女子であり、親戚や友達の家族もいた。年齢は10歳から20歳ぐらいまでであった。授業科目について、国文、英文、算数、音楽のほか、和風式の日本語、手工芸、裁縫、紡績などの科目も多く設置された³²。当時の社会において女性教習が殆どないので、嚴は、特に個人的な交際を通じて川本、山口、野崎という3人の日本女性教習を招いた。そのうち、川本が日本語、音楽、山口は手工芸を教え、野崎は紡績から綾織、平織まで、タオルを織るという織物科目を担当した³³。1905年、嚴は嚴氏女塾を「嚴氏女学」と改称し、その修業年限を7年（初等4年、高等3年）に変更し、もともとの授業科目をもとに物理、化学、歴史、地理、図画などの科目を加えた。

1905年、幼児教師を養成するため、嚴は専門的な保母講習所を設立した。まもなく、同所には教育実習のための蒙養院も付設され、4～6歳の子ども30名ぐらいを募集した。毎日の活動時間は午前9時から11時半までである。これが天津の幼児教育の始まりである³⁴。嚴はその蒙養院のために高く大きい葦簣張りを立てて活動室とし、また子ども活動の組分けと教師の休憩のために葦簣張りのそばに別室も設置した³⁵。また、嚴は特に日本から大野鈴子を招聘し、保母講習所と蒙養院の授業を担当させた。当時大野の様子について、嚴の孫である嚴仁清は以下のように追憶している³⁶。

大野鈴子は保母講習所で保育法、音楽、ピアノ、体操、遊戯、手工などの科目を担った。大野は中国語ができないため、日本語に堪能な嚴智鑄が通訳を行った。……大野は丁寧にピアノを教え、受講生に対する要求も非常に高かった。……受講生は卒業時、皆少なくとも行進曲を弾け、難しい曲を弾ける者もいた。……蒙養院は実習の場である。大野は半日授業し、半日蒙養院で受講生の実習を指導した。……大野は最初に自分でピアノを弾いて手本を見せ、唱歌や遊びを教えた。その後、受講生はそれを子どもに教え、大野はそばで指導した。蒙養院の設備は

²⁹ 嚴仁清「祖父嚴修在天津創辦幼兒教育的回憶」（中国人民政治協商會議天津市委員会文史研究委員會編『天津文史資料選輯』25、天津人民出版社、1983）、47頁。

³⁰ 高静璐「中国学前教育拓荒者：暨恭賀盧樂山先生百歲壽辰」（『学前教育』6、2017）。

³¹ 「女学起点」『大公報』（1903年4月14日付、第4面）。

³² 前掲『嚴修年譜』、144頁。

³³ 齊植璐「天津近代著名教育家嚴修」（前掲『天津文史資料選輯』25）、14頁。

³⁴ 来新夏『天津近代史』（南開大学出版社、1987）、289頁。

³⁵ 前掲「祖父嚴修在天津創辦幼兒教育的回憶」、49頁。

³⁶ 拙稿「清末中国における女子教育近代化過程の一断面：日本女性教習の活動及びその特色を中心に」（『文化共生学研究』17、2018）。

日本から購入して整えた。例えば、ピアノ、オルガン、児童の机、椅子、教具などはどれも日本で作られたのである。……童謡も殆ど日本語から翻訳したものであり、多くは礼儀、動植物などに関する内容である。……例えば、『雄鶏打鳴』という童謡は、北京と天津の多くの蒙養院に伝わり、よく使われた。……物語は日本の桃太郎や小雀などがあった。

1907年、天津の『醒俗画報』に、特に「參觀蒙養院紀盛」と題して、管理（蒙養院の職務）の嚴約敏（嚴修の兄弟の子）が子どもの10数名を遊戯場に引率し、礼をさせたあと、大野のピアノに伴って保母の韓升華と一緒に歌うという活動場面の挿画を登載し、入学を早く申込むことを勧めた³⁷。

ここで強調したいのは、保母講習所から卒業した者の多くは、嚴氏蒙養院、天津河北蒙養院、京師第一蒙養院、私立朝陽蒙養院及び嚴氏女学、官立第一・第五小学堂で教職に就いたことである。当時、幼児教師が極めて足りない中国において、それらの教師の養成は、天津や北京の幼児教育の発展に大きな貢献をしたと言える³⁸。

嚴氏蒙養院、嚴氏女学、保母講習所のほか、嚴は多くの女子学堂を創設した。例えば、1904年末の天津公立女学堂（直隸総督院署の後ろ）、1905年の北洋高等女学堂と官立女子小学堂（河西北窯洼）、1908年の京師女子師範学堂などが挙げられ³⁹、親友温世霖（1870～1934、字は支英、直隸省の天津出身。1900年から温氏女校、女子職業学校などを創立⁴⁰）の普育女子学堂の設立に協力したこともある⁴¹。

3. 張謇『癸卯東遊日記』と扶海垞家塾、通州女子師範学校

張謇（1853～1926）、字は季直、号は啬庵。江蘇省の海門出身。1885年光緒乙酉科順天郷試の挙人、1894年に一甲第1名で進士に合格し、翰林院修撰に任ぜられる⁴²。清末民初の教育家、実業家として中国の女子教育を重視した。19世紀90年代末期の張は、中国歴史上、最初の中国人自営女学堂、すなわち中国女学堂の計画準備会議（滬上創辦中国女学堂一品香会議）に参画したことがあり、「竭力巨賛（力を尽くして協力する）」⁴³という態度を示した。

呉汝綸、繆荃孫などが先行して日本への視察を行ったことに対して、張は強い関心を持ち、その

³⁷ 「參觀蒙養院紀盛」（『醒俗画報』4、1907年3月上旬刊付、のち侯杰、王昆江『醒俗画報精選』天津人民出版社、2005）、224頁。

³⁸ 前掲「祖父嚴修在天津創辦幼兒教育的回憶」、48-49頁。

³⁹ 前掲『嚴修年譜』、167、178-179、215頁。また、李冬君は、1903年嚴が11つの女学堂を創設したと言うが、具体的な女学堂の名称を指摘しない。筆者は関連の記録を見つけることができなかった。李冬君『中国私学百年祭：嚴修新私学与中国近代政治文化系年』（南開大学出版社、2004）、115頁。

⁴⁰ 前掲『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』、1237頁。

⁴¹ 「普育女学之困難」（『順天時報』2852号、1911年8月13日付、第4版）。

⁴² 曹文麟「張季直先生伝」（のち李通甫編『南通張季直先生逝世四十年記念集』文海出版社、1978）、1頁。

⁴³ 経元善「滬上創辦中国女学堂一品香会議」（虞和平編『経元善集』華中師範大学出版社、1988）、188頁。また楊復礼「梁啓超年譜」（中国史学会主編『戊戌变法』4、上海人民出版社、1957）、173頁。

やり方を通じて中国の教育を振興しようとも図った⁴⁴。しかし、当時「世の中に思わぬ事が多くて讒言が横行している」⁴⁵という朝廷内の派閥争いに巻き込まれたゆえ、躊躇ってなかなか出立しなかった。1903年正月になって、大阪で開催された第五回内国勸業博覧会に当たり、張は徐乃昌（1869～1943、字は積余、号は隨庵。安徽省の南陵出身⁴⁶）を介して日本駐江寧（現南京）領事の天野恭太郎の招待状をもち、5月23日上海から出発し、期間を70日とする視察を始めた。このたび張の渡日した目的は、博覧会を参観することであるが、日本の幼稚園と女子学校への視察は少ない。ここでも、張の『癸卯東遊日記』のなかでその関連の視察情報をいくつか選び取った。具体的には以下の通りである⁴⁷。

5月25日 私立鶴鳴女子学校への参観

某日本人は案内としてまず入った。入って教室を見た。女子の二十余人は、内向きに地べたに座り、一人の教員は外向きに立った。黒板に菅原道真の『去年今日侍清涼』という七言絶句が書いてあり、生徒に口授している。一室に二十余人は並んで低い腰掛けに座り、毛筆をもって草花を描いている。また、そのうち一室があり、女子の十余人は裁縫や刺繍などの針仕事をしている。特別な裁縫教室であろう。すべての部屋は大きくない。

6月1日 愛日小学校と愛珠幼稚園への参観

藤沢士亨元が訪問し、私と一緒に愛日小学校に行った。……校長は高橋季三郎で、教員は計

⁴⁴ 例えば、1902年10月16日、張は呉汝綸の日本への学務視察が終わって既に帰国したことを聞いてから、すぐ18日の客船で上海にある呉を訪ね、その『東遊叢録』を閲覧した。李明勛、尤世璋主編『張謇全集』（上海辞書出版社、2012）8、527頁。

⁴⁵ 前掲『癸卯東遊日記・籬齋東遊日記』、1頁。原文は「会世多故、讒言高張」である。

⁴⁶ 前掲『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』。1017頁。

⁴⁷ 前掲『癸卯東遊日記・籬齋東遊日記』、4-5、10-14頁から抜粋。原文は以下の通り。

5月25日 参観私立鶴鳴女子学校 日人某先入為介、入見教室、女子二十餘人席地坐、内向、一教員面外立、黒板写菅原『去年今日侍清涼』七言絶一首、口授之。一室二十餘人列坐、据矮几、臨毛筆、画花卉。内又一室、十餘女子專針黹、蓋特別裁縫教室。室皆不大。

6月1日 参観愛日小学校与愛珠幼稚園 藤沢士亨元造来、同至愛日小学校。……校長高橋季三郎、教員十二名、男女各半。……教科為修身、国語、国語中分読方、綴方、習字為三、餘則算術、体操、唱歌、女子別加裁縫一科、毎日五小時。参観時……女子教室教唱歌、歌以風琴為節。先歌大阪市歌各一闕、次遊戲唱歌、皆女教員、遊戲歌即愛日尋常小学校之歌也。……高橋先令諸女学生集運動場施敬礼、觀其遊戲、唱歌；……又令女学生行抹茶礼。……次觀愛珠幼稚園、園長塩野吉兵衛、園之教室無多、一室僅容三四十人、四周植紫藤為棚……課程則唱歌、遊戲、積木、折紙而已。是日、為幼稚園開設二十三年記念会、塩野、高橋導諸兒童、先于日皇御影前行鞠躬礼、既而演説發達保育之義……既導觀其遊戲運動。一人奏風琴、二保母導諸童為種種遊戲……

6月3日 参観桃山女子師範学校及其附属幼稚園 西村小池偕同伯斧往觀桃山女子師範学校。校容師範生一百二十人、皆食宿于校。自修室即在寢室之内、每室十二人、室以席度、每席長約中国营造尺之六尺、広半之、縦六横七、凡四十二席……理化室几案似前小学校、而每案皆相同二尺許、能容人行。又室之三面各有四窓、窓皆涂黒、其南面窓下置置光鏡、以教授光学。……附属幼稚園、教室少而遊戲場多、室中案長三十八寸、高十九寸……案面皆画方罫、教習黑板亦画方罫、見教折紙及積木者。……凡所為、皆使小兒以腦力相磨、又各寓于遊戲之事、故一園之中兒童八十人、有愉快之容而無愁苦之色。美哉！次觀女師範生体操……

十二名、男女半々である。……授業科目は修身、国語であり、国語が読み方、綴り方、習字に分けられる。ほかの科目は算術、体操、唱歌である。女子に対してさらに裁縫科目も増設され、毎日五時間である。……参観のとき、女子教室で唱歌を教えていた。歌はオルガンをもって拍子を取り、まず大阪市歌、つぎに遊戯唱歌を歌った。教員はすべて女性教員である。遊戯の歌は愛日尋常小学校の歌である。……高橋は、まずすべての女生徒を運動場に集めて敬礼をさせ、その遊戯、唱歌を観覧した。……また女生徒に抹茶の礼をさせた。……つぎに愛珠幼稚園を参観した。園長は塩野吉兵衛である。園内の教室は多くなく、一室は三、四十人を収容できる程度で、その周りに藤棚がある。……授業科目は唱歌、遊戯、積み木、折紙のみである。今日はちょうど幼稚園開設二十三年記念会にあたり、塩野、高橋は児童を導き、まず御真影の前に礼をさせ、後で保育を発達させる意義を演説した。……やがてその遊戯、運動を観覧した。一人はオルガンを弾いて、二人の保母はすべての子どもを導いてさまざまな遊戯をさせた。……

6月3日 桃山女子師範学校とその附属幼稚園への参観

大阪朝日新聞社の西村時彦、小池信美、伯斧と桃山女子師範学校に行った。この学校は百二十人の師範生を収容でき、みな学校に住んで食事をする。自修室は寝室の内にあり、部屋ごとに二十人である。部屋は席をもって計算する。一つの席の長さは約中国の营造尺（建築用の物差し）の六尺、幅はその半分、縦は六席、横は七席、計四十二席である。……理科室の机は前の小学校に似て、そして机と机の間は二尺隔たって人が通ることができる。また、室の三面にそれぞれ四つの窓をつけてすべて黒く塗られた。その南側の窓の下層には、光学を教えるために光鏡が置かれる。……その付属幼稚園は、教室が少なく遊戯場が多い。室内の机は長さが三十八寸、高さが十九寸である。……机の上にすべて罫線が引かれている。教習の黒板にも罫線が引かれ、折紙や積み木を教える者を見た。なすことはみな、子どもの脳力を研鑽させ、さらに遊戯にかこつけたものである。それ故、幼稚園の八十人の子どもは、うれしい顔をして心配な顔をしな。いいことだ。つぎに女師範生の体操を観覧した。……

この時の日本女子教育への視察は張に大きな示唆を与えたと言え、幼稚園・女学校の教室や宿舍の施設から、授業科目の設置、保母・教員や子ども・生徒数の基本情報、及び運営経費の源まで、特に保母・教員の授業現場に対して詳しく記録していた。視察の順序について、張は詳しい計画を定めた。すなわち幼稚園→女子小学校→女子師範学校という初等から高等までである⁴⁸。視察中の張は、就中、日本の遊戯、唱歌、体操、裁縫、家政などの授業科目と授業方法をうらやましく感じ、その記録において「美哉！美哉！（いいことだ）」としきりに褒めた。愛珠幼稚園の記念会において、彼が特に筆をふるい、西晋の文学者である張華の「勵志一首」から「成人在始（人を成すは、初め

⁴⁸ 同上、10頁。

に在り)」という詩語を節録して書いて幼稚園に贈った⁴⁹。また、帰国前にわざわざ大阪市東区島町にある川藤八店で幼稚園の恩物を購入した⁵⁰。これは張が通州（現南通）で幼稚園・小学校レベルのような家塾、及び通州女子師範学校を創設するために多くの参考になった。

帰国後、張はその見聞録を『癸卯東遊日記』として整理し、同年10月に刊行された。彼が「民智を開くには、教育を普及し力行しなければならず」、また「日本は我が国と同洲、同文、同種で、学制の改良は我が国に先んじている」ため、日本の教育を鑑としなければならないと強調し⁵¹、それと同時に「僕が教育を始めるのは、もともと世間の流れに合わせるのを好まず、とりわけ女学に対してはそうだからだ」という謹厳実直な態度が断固としていた⁵²。

1904年3月11日、張は自分の邸宅で酒席を設け、中国における最初の師範学校である通州師範学校教習、親友王国維（1877～1927、字は静安、浙江省の海寧出身⁵³）の在日同窓である吉沢嘉寿之丞とその夫人、日本家塾啓蒙教育の教師兼保母である森田政子を招待し、ともに「扶海垞家塾章程」の起草を相談した。翌日、張謇の兄弟である張督は特に吉沢夫婦のためにも宴席を設けた。3月14日、家塾は始まり、生徒は計10人であり、そのうち7歳5人、10歳4人、11歳1人である⁵⁴。その家塾は一家の児女の教育ひいては宗族・親戚・町内の児女を対象に、その体育・徳育・智育のバランス発展を図り、子どもの教育を受ける興味を高め、直感的に易しく理解させることを目指していた。扶海垞家塾の授業科目について、中国人教習を招いて修身、識字・習字・読書・作文などを含む国文を教えるほか、主に日本を参考にして森田を招聘し、体操、算術、音楽、図画、幼稚遊戯といった半分以上の授業科目を担当させた⁵⁵。

張は日本の幼稚園の遊戯唱歌に対して非常に興味をもち、帰国の途中で『愛国先教稚子歌（愛国は、まず幼児に歌を教えることから始まる）』という紀行詩を作った⁵⁶。3月16日、森田とともに『池中之金魚』を作った。それだけでなく、2人は日本の伝統的の歌謡のメロディーをもとに中国語の歌詞を付けて『蓮華花歌』、『風車歌』をも作った。中国語版の『蓮華花歌』は、日本原版によく似て、

⁴⁹ 菅野正「大阪愛珠幼稚園・北野中学校を参観した清国人」（『奈良史学』25、2007）。

⁵⁰ 前掲『癸卯東遊日記・籟盒東遊日記』、47頁。

⁵¹ 「師範学校開学演説」、「通州開学致教習監理辞」（前掲『張謇全集』4）、123、69頁。それぞれの原文は「開民智、惟有立行普及教育」、「日本与我同洲、同文、同種、改良学制在我之先」である。

⁵² 「南通女師範廿周年記念演説」（前掲『張謇全集』4）、638頁。原文は「鄙人辦教育、素不喜随波逐浪、于女学尤然」である。

⁵³ 前掲『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』、57頁。

⁵⁴ 前掲『張謇全集』8、578頁。原文は「3月11日 為兩教習置酒。訂家塾章程。12日 叔兄為教習置酒。14日 家塾開学、共生徒十人、内七歳五人、十歳四人、十一歳一人」である。

⁵⁵ 「扶海垞家塾章程」（前掲『張謇全集』5、2012）、53-54頁。章程の趣旨と養成方法については、以下の通り。扶海垞家塾章程 第一宗旨 因謀一家児女之教育而及族戚隣里之児女、故設此塾。第二方法 一、謀体育德育智育之本、基于蒙養、而尤在就児童所已知、振起其受教育之興味、使之易曉而直覺。故延日本女教習教授体操、算術、音楽、図画、兼習幼稚遊戯之事；延本国教習教授修身、国文之事（国文兼識字、習字、読書、綴文）。

⁵⁶ 前掲『癸卯東遊日記・籟盒東遊日記』、51頁。

ただその結末に易しい中国俗語を加えたのに過ぎない。それとは逆に、『風車歌』のメロディーは大きく変えられ、特に「人心不息兮、風車不息兮（人の心は停止せず、風車も停止しない）」という歌詞が、その全曲を新しい積極的な境地に達させたことが窺える⁵⁷。

また、1905年、張は「女子教育は教師が必要で特に国民教育を施すにはとくに母が必要であるゆえ、さらに女子師範学校を創設すべきだ」⁵⁸という考えに基づき、地方名士の資金を集めて張督、沈啓謙、徐蓮秦らと一緒に城中柳家巷の陳氏旧居を買って女子学校を創設しようとした。清末学校の通称「学堂」と異なり、張は日本を参考にしてそれを通州公立女学校と名付けた⁵⁹。翌年2月ごろ、名門才女である姚蘊素（1864～1944、名は倚雲、安徽省の桐城出身⁶⁰）を推挙して校長とさせ、3月25日、その学校が開校した。開校の初め、新入生は35名のみであり、初等、高等に分けられた。授業料は初等1年6元、高等1年12元で、食事と宿泊費は1年40元である⁶¹。その師範学校は、日本の女子教育を手本としても森田を招聘し（契約年限は1906年2月から1年、1907年帰国）、算数、体操、唱歌、図画、手工などの近代的な科目を担当させた⁶²。同年12月、張は生徒に対する成績の考察を通じて、通州公立女子学校を通州女子師範学校と改称して単独で生徒を募集し、そしてもともとの初等、高等をその附属小学校とするという計画を立てた。それは中国で最も早く開設された師範付属小学校の1つである。1907年、前文で述べた単士厘の嫁、すなわち日本実践女学校から卒業した錢豊保は、招聘にも応じて来校し、1年間の授業を担当した⁶³。また1908年正月、通州女子師範学校は女子手工伝習所を付設し、日本の編物、造花という2つの科目を設置した⁶⁴。

1910年、入学志望者が多くなって、張は市河岸珠媚園遺跡にある王氏のビル及びそのまわりの民家数百室をも購入し、通州女子師範学校とその附属小学校の新しい学区とした。その「母女団体」という新式の運営パターンについて、師範学生は付属小学校で実習でき、逆に付属小学校の教員は、師範学校教員の指導のもとで、教育面の考察研究を行うこともできる⁶⁵。張は5年間の努力を経て、その学校が女子師範を中心にして、附属小学校、女子手工伝習所などを付設した総合的な教育機関

⁵⁷ 張静蔚「張謇与学堂楽歌」（『音楽芸術』2、2003）。また前掲『張謇全集』8、579頁。

⁵⁸ 「通州女師範校第一次本科実習教授評案序」（前掲『張謇全集』6）、367頁。原文は「以女子教育之不可無師、与国民教育之尤須有母、更設女子師範学校」である。

⁵⁹ その女学校の校名は「通州公立女学校」であるが、実際にそのあとの運営経費については、すべて張謇に頼った。「北京商業学校演説」（前掲『張謇全集』4）、187頁。原文は「惟師範学堂暨女子師範学堂之経費、皆鄙人歷年所得之贏余」である。

⁶⁰ 前掲『癸卯東遊日記・籀齋東遊日記』、51頁。

⁶¹ 前掲「南通女師範廿周年記念演説」、637頁。また、「南通女子師範学校大事記」（前掲『中国近代学制史料』2輯下冊）、723頁。

⁶² 拙稿「清季日本女性教習拾遺」（『近代中国婦女史研究』29、2017）。

⁶³ 前掲「南通女子師範学校大事記」、723-724頁。また、石井洋子「中国女子留学生名簿：1901年～1919年」（『辛亥革命研究』2、1982）。

⁶⁴ 同上「南通女子師範学校大事記」。

⁶⁵ 張俊平、蔣保華「一切為了孩子的成長：江蘇省南通師範学校第二附属小学办学文化解読」（『江蘇教育』4、2016）。

になり、とくに1年制の予備科、4年制の師範本科および初・高等小学校という教学体系を整えた。その女子師範本科は、近代中国における女子師範教育の幕開けと言える⁶⁶。

開校以来、張は日本から伝えられた家政科をとりわけ重視し、「服習家政、勤儉温和」という校訓を制定しただけでなく、「家事の要領を掴んで、その勤勉を尊び、節約を求め、秩序を重んじ、周密を好み、清潔を愛する徳性の養成を兼ね備えさせる」という要旨を伝えた。そのうえ「授業科目は衣食、居住、看病、育児、家計、簿記及び家政整理に関するすべてのことであり、家事を教授する順序と法則についても教える」という具体的な授業内容を決めた⁶⁷。1910年、張は通州女子師範学校の新学区開学式において、家政科設置の意義について以下のように述べている⁶⁸。

今から第十学期が始まるにあたり、家政を重視すべきであり、凡そ裁縫などの各科目はすでに準備した。家政とは、女子が世の中に役に立つためにこれ以上の重要な事業はない。この事業は学ぶことから始まる。家政という科目について、多くは作法であるが、婦徳をも含んだものである。なにも身につけずに道徳をなせるものはいない。皆さんはご勉勵ください。

また、扶海垞家塾と同様、張は、日本視察中に生徒を教化して気風を開くという校歌の役割を忘れず、1910年、以下の通州女子師範学校校歌を作った⁶⁹。その歌詞のなかでも、張は、家政の重要性を強調し、さらに民が富んで国が栄えるのに役立つという願望がよく窺える。

人生必有家、家政頼女治	人生には家がなくてはならず 家政は女子に頼って治まる
女知向学明義礼	女子が学問に志すことを知り 儀礼を明らかにすれば
相夫教子可与古之賢母令妻比	夫を助けて子どもを教育すること 古の賢母令妻に比肩する
養成賢令材、道从師範始	優れた才能を養う道は 師範から始まり
……	……
女子有学兮欣欣棣通	女子に学があれば 欣欣然と道理に通じることができ
女子有学兮邦家之隆	女子に学があれば 国の隆盛である

⁶⁶ 金艶「南通女界の第一塊碑石：致力于女子教育的才女姚蘊素」（南通市政協学習文史委員会編『張謇の交往世界』中国文史出版社、2011）、500頁。

⁶⁷ 張緒武主編『張謇』（中華工商聯合出版社、2004）、124頁。原文は以下の通りである。其要旨在使能得整理家事之要領、兼養成其尚勤勉、務節儉、重秩序、喜周密、愛清潔之徳性。其教課程有衣食、居住、看病、育児、家計、簿記及関与整理家政之一切事；並授以教授家事之次序法則。

⁶⁸ 「女子師範学校市河岸新校開学演説」（前掲『張謇全集』4）、167頁。原文か以下の通り。至于自今第十学期始、当注意家政、凡縫紉各科一切已為予備。家政者、女子有益于世莫大之事業也。事業从学始。家政一科、多是作法、而婦徳寓焉。無徒手空而可為道德者。諸生勸之。

⁶⁹ 「通州女子師範学校歌（一）」（詹皖『民智兮国牢 南通近代校歌歌曲集』南京師範出版社、2011）、2頁。また、その通州女子師範学校歌だけでなく、張は通州師範学校校歌（1905）、懇牧郷高等小学校校歌（不詳）、私立張徐女校校歌（不詳）、通州師範学校付属小学校校歌（不詳）などの創作に参加して歌詞を作った。

おわりに

以上本稿では、清末期に官紳らの日本幼児教育・女子教育に対する視察の背景、概要、及びこうした日本女子教育受容の背景の下、中国女子教育の振興に尽力した単士厘、嚴修、張謇という3人の具体例を検討してきた。以上の検討を踏まえ、清末、草創期における中国女子教育の日本化に関する官紳視察の影響について、若干の私見を述べておきたい。

1907年まで内外多事多難の秋であった清政府は、教育システムの構築過程において、いまだ中国女子教育の社会地位を認めなかった。しかし、それらの渡日官紳は、それぞれの視察過程において、日本女子教育への視察結果を適時・積極的に中国へ導入し、中国女子教育を刺激・振興する主要な動力源の1つになり、さらに近代における女子教育合法化を促す推進剤になった⁷⁰。また、本文で取り上げた「北嚴南張」という具体例から、中国の女子教育が、その渡日視察経験をもつ官紳の努力下で、清政府の官営女学より先に地方で実施された一端もよく窺える。つまり、清末期の女子教育は、まず地方で始まり、女学章程の公布においてようやく全国で興ったといっても過言ではない⁷¹。

しかし、ここで指摘する必要があるのは、まず、彼らの視察目的はそれぞれ異なり、たとえ専門的な教育視察でも、実際に各類型の男子教育を中心に展開されたに過ぎなかった。それゆえにそれぞれ視察の付属品としての女子教育は、清末の中国では普及し難い運命にあった。そして、彼らが出版した『東遊日記』の波及範囲について、朝廷官吏や地方郷紳の著書であったため、その影響力は主に中上流社会層や各都市部のみに止まったであろう。

つぎに、それらの官紳は、在日視察の過程において、男女共学の学校を多く見学したが、帰国後、清政府に諫言することはなく、それを試みることにすら恐れていたことは言うまでもない。「男女有別」という伝統思想は、つとに彼らの心の中に深く根を下ろしていたと言え、彼らは初めから終わりまでその限界を一步も越えようとしなかった。

最後に、日本受容の一環としての近代中国女子教育は、その誕生の日から主に日本女子教育の影響を受けたのである。例えば、当時見られた近代的、先進的な家政、裁縫などの授業科目は、同時期の西洋の自由民主、男女同権などに遅れたが、ただ中国の伝統的な女徳と類似した点が多いので、保守的な清政府によっても開明的な地方官紳によっても大いに宣伝され、そのうえ多くの女学堂で先を争って導入しようとする対象になった。これによって清末期中国における女子教育は、濃厚な

⁷⁰ 例えば、京師大学堂総教習の呉汝綸により書かれた『東遊叢録』は大いに影響があり、1903年張之洞らが制定した近代教育システムの「癸卯学制」の重要な根拠になった。これによって中国の女子教育の実現は本格的に日程にのぼった。1907年、学部右侍郎に任命された嚴修は、羅振玉、范源濂などの開明的な名士を招致し、日本女子教育を参考に「奏定女学堂章程摺」を奏上して「今の状況で女学を創設するのが必要な計画だ」と痛切に感じ、ついに女学堂章程の公布を実現した。章開沅『張謇伝』（中華工商聯合出版社、2000）、165頁。前掲『嚴修年譜』、176、180頁。また前掲『中国近代教育史資料匯編・学制演變』、575頁。

⁷¹ 前掲「清季日本女性教育拾遺」。

日本の特色を帯びたと言える。また、当時の清政府は、張謇のような数少ない官紳が女子も国民教育の範疇に属すると唱導しても、ただ依然として日本女子教育の授業科目を模倣するのみであり、女子教育の国民化という思想面については全く触れなかった。

ともあれ、官紳らが在日の視察過程において、女子教育に対して日本教育者と多くの筆談交流をも行ったことに関しては、本稿において十分に論じることは適わなかった諸問題を含め、稿を改めて論じたい。